ほうこん

題字・清水英夫

GALAC・11月号・付録
2014年11月6日発行（毎月1回6日発行）
昭和43年3月8日第三種郵便物許可

〒160−0022
東京都新宿区新宿5−10−14　中村ビル2F
NPO法人放送批評懇談会
TEL（03）5379-5521／FAX（03）5379-5510
ホームページ　http://www.houkon.jp/
Eメール　kondankai@houkon.jp
編集・藤田真文

第52回ギャラクシー賞上期各部門受付中

―9月理事会報告―

2014年9月30日、9月理事会が開催された。

1．委員会活動報告

◇出版事業委員会　飯田編集長

・8月20日と9月24日に編集委員会を開催した。12月号特集「メディア業界の地殻変動」で川上量生さん、船越雅史さんにインタビューした。「頻発する地域限定災害」でキー局、広島、北海道の放送局へのアンケートも実施する。表紙は赤江珠緒さん、パーソンは菅野祐悟さん。2015年1月号の特集は「4K8K」。表紙は高橋克典さん、パーソンはビデオリサーチ社長の秋山創一さん。

・「GALAC」の電子化については、原稿の依頼書にも電子化のお断りを入れるようにした。

◇選奨事業委員会

〈テレビ委員会〉丹羽委員長

・ギャラクシー賞上期の応募数。9月5日締切分は100本だった。現在視聴作業中。

・9月1日に8月度の月評会を開催して「かたりべさん」（NHK）「NHKスペシャル　水爆実験60年目の真実」「NNNドキュメント14　歴史に挑む高校生　日韓40年目の修学旅行」（読売テレビ）「6人の村人！全員集合」（TBS）の4本を選んだ。

〈ラジオ委員会〉橋本委員長

・新しく委員に中村亮平さんに加わってもらった。

・8月26日と9月18日に定例会を開催した。8月はKiss　FM KOBEの「REBOOT!!」とエフエム大阪の「hug+」を聴取した。9月はニッポン放送の「テレフォン人生相談」とTBSラジオの「ジェーン・スー　相談は踊る」を聴取した。

・「入賞作品を聴いて、語り合う会」を9月28日に東京エフエムで開催した。参加人数は一般が40名、学生が12名で盛況だった。聴く会開催後の懇親会も学生が多数参加してゲストとの交流を楽しんだ。

・第52回上期より生ワイド部門Ⅰ、Ⅱを生ワイド部門に統一した。

〈CM委員会〉稗田委員長

・8月27日と9月29日に定例会を開催した。

・9月に入ってJAAと宣伝会議へギャラクシー賞の告知を兼ねて訪問した。今後はプレスリリースを流す予定。

〈報道活動委員会〉鈴木委員長

・「ギャラクシー受賞作を見て、制作者と語る会」は11月30日にNHK放送博物館で開催する。ゲストはNHKと札幌テレビ放送、BS朝日の制作者の予定。

◇企画事業委員会　川喜田委員長

・22日に委員会を開催した。次回のシンポジウムはキュレーションという新しい価値を生み出す力を

4ページに続く

テーマに企画、人選している。10月中には固めたい。

◇マイベストTV賞プロジェクト

滝野プロジェクトリーダー

・8月4日にミーティングした。今後はフェイスブックを展開する。特別投票に変わる新しい企画を考えていく。ヤフーとの協力関係も進めていくが、他社とも交渉していく。

2．その他

①ギャラクシー賞　バードマン覚書合意の報告　藤田専務理事

9月12日にデザイナーの松永真さんと覚書の確認をした。

②ギャラクシー賞　トロフィーレプリカの件　藤田専務理事

・トロフィーのレプリカの詳細について討議。大きさは本体の80％で、大賞は金、優秀賞は銀、選奨は黒、個人賞他は赤とする。名入れについては本体に入れず、カードを添える。カード作成は一枚2万円かかるので、もう少し費用を抑える方法を探す。

・レプリカ販売を申し込めるのは、受賞関係者のみとする。

③入会・退会の件

〈入会〉正会員・中村亮平さん

〈退会〉維持会員・テレビ高知

④ギャラクシー賞　エントリー電子化計画について　中島事務局長

・放送文化基金賞、ATP賞などを調査。当初エントリーだけの電子化をイメージしたが、その後の展開のためにはもっとしっかりしたシステムを作る必要があることがわかった。システムの構築にはある程度の経費が必要となる。この件について討議。藤田専務理事より来年度に予算を計上してシステムをどこまで作成するのか検討したいとの申し出があった。

→了承。

⑤日韓中テレビ制作者フォーラムの報告　鈴木理事、藤田専務理事

・今回日本側の上映作品で、好評を得て盛り上がった作品と、物議を醸した作品があった。

・共催の件　前回の理事会では協力を確認したが、その後、共催の形となった。

⑥「ザ・ベストテレビ2014」「ザ・ベストラジオ2014」放送実施の報告　中島事務局長

「ザ・ベストテレビ2014」は9月28、29日に放送された。「ザ・ベストラジオ2014」は9月27日、10月5、12、18日に放送予定。

⑦NPO東京TVフォーラム「Tokyo Docs2014」後援

中島事務局長より、内容説明及び今までの経過説明。→了承。

◆次回以降の理事会

10月28日（火）、11月26日（水）

12月17日（水）

【出席】音好宏、橋本隆、藤田真文、川喜田尚、飯田みか、丹羽美之、稗田政憲、鈴木嘉一、滝野俊一、石井彰、茅原良平、上滝徹也、小林毅、嶋田親一、中島好登

会議記録

［8月］……

4日　マイベストTV賞出版編集委員会

20日　企画事業委員会

25日（選奨）ラジオ定例部会

26日（選奨）CM定例部会

27日

［9月］……

1日（選奨）テレビ月評会

18日（選奨）ラジオ定例部会

22日　企画事業委員会

24日　出版編集委員会

29日（選奨）CM定例部会

30日　理事会

レポート「第14回 日韓中テレビ制作者フォーラム in 横浜」

日　時：9月15日（月・祝）～18日（木）
会　場：横浜シンポジアホール

飯田みか

「日韓中テレビ制作者フォーラム」は、日本・韓国・中国のテレビ番組制作者・研究者が、それぞれの作品を鑑賞・議論し、相互理解を深めることを目的に毎年開催してきたイベントです。各国の主催団体は「放送人の会」「韓国ＰＤ連合会」「中国電子芸術家協会」で、放送批評懇談会は共催の位置づけになっています。

開催場所は各国の持ち回りで、今年は日本でした。横浜港を臨む産業貿易センタービル９階にあるラウンジからの眺望が見事！（上写真）

日本人96名、韓国人40名、中国人25名が参加したフォーラムを、簡単にレポートします。

魅力的な番組群に寄せられた好意と活発な質疑応答

3か国から3作品ずつ、全部で9作品が出品されました。それぞれの上映後に感想と質疑応答があり、いずれの作品にも活発な発言がありました。

私の印象に残った番組について、国ごとに簡単に紹介します。

まず韓国。ドラマ**「星から来たあなた」**（ＳＢＳ）は、17世紀と今をつなぐＳＦファンタジーでした。中国の参加者が「中国でも大人気」と語っていたのがうなずける、まさに第2回を見たくなるエンターテインメントでした。

「儀軌、8日間の祝祭」（ＫＢＳ）は二百年前の書物を基にしたミステリアスなドキュメンタリー。緻密な作りで、4Ｋで撮った美しい画像には目を見張りました。再現ドラマやＣＧアニメを使った手法は私の好きな「タイムスクープハンター」（ＮＨＫ）や「謎解き！江戸のススメ」（ＢＳ―ＴＢＳ）を彷彿とさせ、私の好きな韓国時代劇で知ったエピソードも入っていたので、たいへん楽しめました。

次に中国。ドキュメンタリー**「茶、一葉の物語」**は各地で飲まれているさまざまなお茶の文化をオムニバスで美しく綴っていました。少数民族を登場させる気を配った作りで、画面も美しかったのですが、仕上がりすぎというか、ド

初日の歓迎レセプションでは、（左上から）放送人の会・今野勉会長（フォーラム組織委員長）、中国電子芸術家協会・范宗钗副秘書長、韓国PD連合会・朴健植会長、韓国放送文化振興会・金文煥理事長、放送人の会・大山勝美特別顧問（フォーラム組織委員会顧問）のほか、横浜市の中山こずゑ文化観光局長が挨拶。右下は、通訳係の学生たち。

キュメンタリーと呼ぶには違和感を覚えるほどの完成度にやや違和感を覚えました。「現場でのアドリブがない。あらかじめ作ったシナリオに沿って撮影したのではないか」と質問した韓国の制作者が「我々は絵の上に言葉を乗せるが、この作品は言葉の上に絵を乗せたようだ」と評したのが言いえて妙でした。

「漢字の英雄」はクイズ形式で7～17歳の子どもの漢字の知識をはかるバラエティ。簡体字はあるものの、基本的には同じ文字なので十分に楽しめました。なにより司会者とコメンテーター（学者）のコメントが当意即妙。気の利いた司会ぶりにてっきり有名な芸人だろうと思い休憩時にプロデューサーに尋ねたところ、音楽番組のプロデューサーとのこと。驚きました。

日本からの最初の出品作**「熱中コマ大戦～全国町工場奮闘記～」**（東海テレビ）は、中国、韓国と対照的な緩いドキュメンタリーですが、たいへんな好評を博しました。上演中、私の後ろに座っていた韓国のグループからはたびたび笑い声が聞こえ、番組が追いかけていた会社が勝った場面では拍手さえ起きました。上演後、「ジェットコースターに乗っているように面白かった」（中国の方）、「日本らしい。小さなものから織りなす世界に感動した」（韓国の方）と評され、会場が沸きました。

「最終章を奏でる家～ホームホスピスかあさんの家～」（宮崎放送）もまた、3か国に共通する高齢者の介護問題に光を差し込むドキュメンタリーとして、とても好意的に受け止められていました。

戦争の表現に求められる繊細さとそれでも感じたフォーラムの意義

思いがけず物議を醸したのが、最後に上映された**「基町アパート」**（NHK広島）でした。被爆者や中国残留孤児が多く暮らす集合住宅が舞台の、おじいさんと孫の交流を描いた心温まるドラマ（一部、資料映像）です。中国と韓国の方々から「共感した」「敬意を表したい」という意見があった一方で、「「戦争が『起きた』と言っていたが、『起こした』ではないのか。歴史認識が浅い」という指摘がありました。上演したのが柳条湖事件（1931年9月18日）の前日だったこともあり、それに思い至らなかったことを悔やむ日本人の声も聞こえました。

3か国から絶賛の声が口々に挙がった「熱中コマ大戦」の上演後、壇上に立った東海テレビ放送報道部の鈴木辰明担当部長（右）と阿武野勝彦プロデューサーに賞賛と質問が相次いだ

主催者同士が話し合い、翌朝（最終日）、もう一度この件が取りあげられ、中国側と韓国側が発言しました。的を射た苦言がある一方で、前日の司会者の発言を誤解した言葉もありましたが、怒りを露わにしている発言者に「それは誤解です」と説明すれば解決するわけでもなさそうな雰囲気に、問題の難しさを感じました。

中国側からは「歴史を扱うものは今後避けるべきだ」との意見も出ましたが、「上映には意味がある」「深刻さに気づいていなかったことが問題」と発言した韓国の方もいました。

14年前、初回のフォーラム（日韓のみ）は日本と韓国の間に浮かぶフェリーで開かれ、そのときの制作者たちは「個人」としての参加を重視したと聞いています。けれども残念ながら、「戦争」などが論点になると、個人よりも「日本側」「韓国側」「中国側」と記さざるを得ないような発言になるようです。

このような状況は、今後も続くかもしれません。それでも、こういう議論をこの先も重ねること、その記憶を受け継いでいくことの先に、目指す相互理解はきっとあるとも思えました。